

# 20年以上かけ作成

## 地図への情熱

### 先駆者

長久保赤水「重文指定」

■上■

江戸時代の民の生活を写した「ベストセラー」。高萩市出身で江戸時代の学者、長久保赤水（1717〜1801年）は1779年、日本地図「改正日本輿地路程全図（赤水図）」を完成させた。国の文化審議会は3月19日、赤水の関係資料（同市歴史民俗資料館保管）を国指定の重要文化財（美術工芸品）に指定するよう萩生田光一文科科学相に答申。赤水に魅了され、顕彰活動を続ける関係者に話を聞きながら、赤水の業績と人物像に迫った。

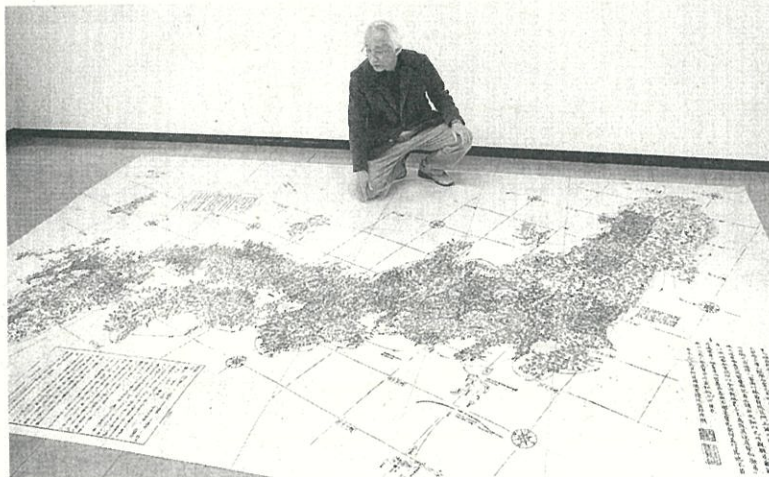
#### ▽「伊能図」より前

地図作成で著名な伊能忠敬による「伊能図」よりも42年早く、赤水は実用性に富み、流石の業績で、赤水は地図作成の通に旅にと民に愛用された。先駆者と言える。



長久保赤水の自画像（高萩市教育委員会提供）

## 高い実用性、広く普及



赤水が地図を学び始めたのは35歳の頃。先人による地図や地誌、官製の国絵図など多くの資料を基に編集。自身の実体験や多くの旅人・知人からの話も参考に、20年以上の歳月をかけ赤水図を作成した。赤水図は129万6千分の縮図で、10里（約40km）が1寸（約3cm）。大きさは縦84・6cm・横128・8cm。国境や関所、城下町、名所など10種類の記号が使われている。日本地図としては初めて経緯線を用いられ、方角が正確に分かる。天文学の知識を取り入れた点も画期的とされる。

赤水は初版発行後も情報収集と改訂を熱心に行った。1791年発行の第2版では、初版で4200カ所だった地名を6千カ所まで増やしている。三浦さんは昨年、赤水図を3倍に拡大した地図を印刷会社に個人で発注して作り、同会に寄贈した。縦215cm、横318cmとなり、面積は9倍と圧巻だ。

#### ▽面積は9倍

赤水図は宿場のある地名や地形などが細かく記載されており、原寸では見づらいのが難点だった。三浦さんは「3倍にしたことで文字が読みやすくなった。例えば自分の出身地の地名などを見られるので、赤水図に興味を持ってもらうことに役立った」と目を細める。

3年前までは赤水について「ちらっと知っている程度だった」と三浦さん。深く知るうち、業績や育った環境に面白みを感じた。赤水は幼くして家族を次々に亡くした。だが「継母は農民だから教育はいい」との方針ではなく、本を読ませ医者や塾に通わせた。良い教育によって赤水という名の『ロケット』がドンと打ち上がった。三浦さんは赤水の生涯を表現する。

原寸の3倍大の赤水図を見詰める三浦邦明さん（高萩市内）